

## 第4章 読書媒体および過去の読書量による現在の意識・非認知能力の違いの検討

### 1. 目的

第2章より、紙以外のツールを利用した読書時間の変化が顕著であることを踏まえ、中心となるツールの違いによる現在の意識・非認知能力の違いを明らかにすることを目的とした。また、小中高の過去の読書量の違いによる現在の意識・非認知能力の違いを明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

前述したマイボイスコム株式会社のモニターである全国の20～60代の男性2,500名、女性2,500名、計5,000名（各年代で男性500名、女性500名）を分析対象とした。使用ツールに関する質問への回答データを用い、Ward法による階層的クラスタ分析を実施した。同様に過去の読書量についても、過去の読書量に関する質問への回答データを用い、Ward法による階層的クラスタ分析を実施した。次に、クラスタを独立変数、年齢を共変数、現在の意識・非認知能力を従属変数とした共分散分析を実施した。クラスタの主効果が有意な場合、Holm法による多重比較検定を実施した。また本調査研究では、変数間の効果の大きさを量的に表した統計量である効果量も含めて総合的に分析結果を解釈した。効果量にはCohen's  $d$  と  $\eta^2_G$  を用い、Cohen (1988, 1992) に倣いそれぞれの基準を、 $d$  は Small = 0.20 以上 0.50 未満、Medium = 0.50 以上 0.80 未満、Large = 0.80 以上、 $\eta^2_G$  は Small = 0.01 以上 0.06 未満、Medium = 0.06 以上 0.14 未満、Large = 0.14 以上と設定した。なお本調査研究においては、すべての分析内の検定における有意水準を5%水準とした。

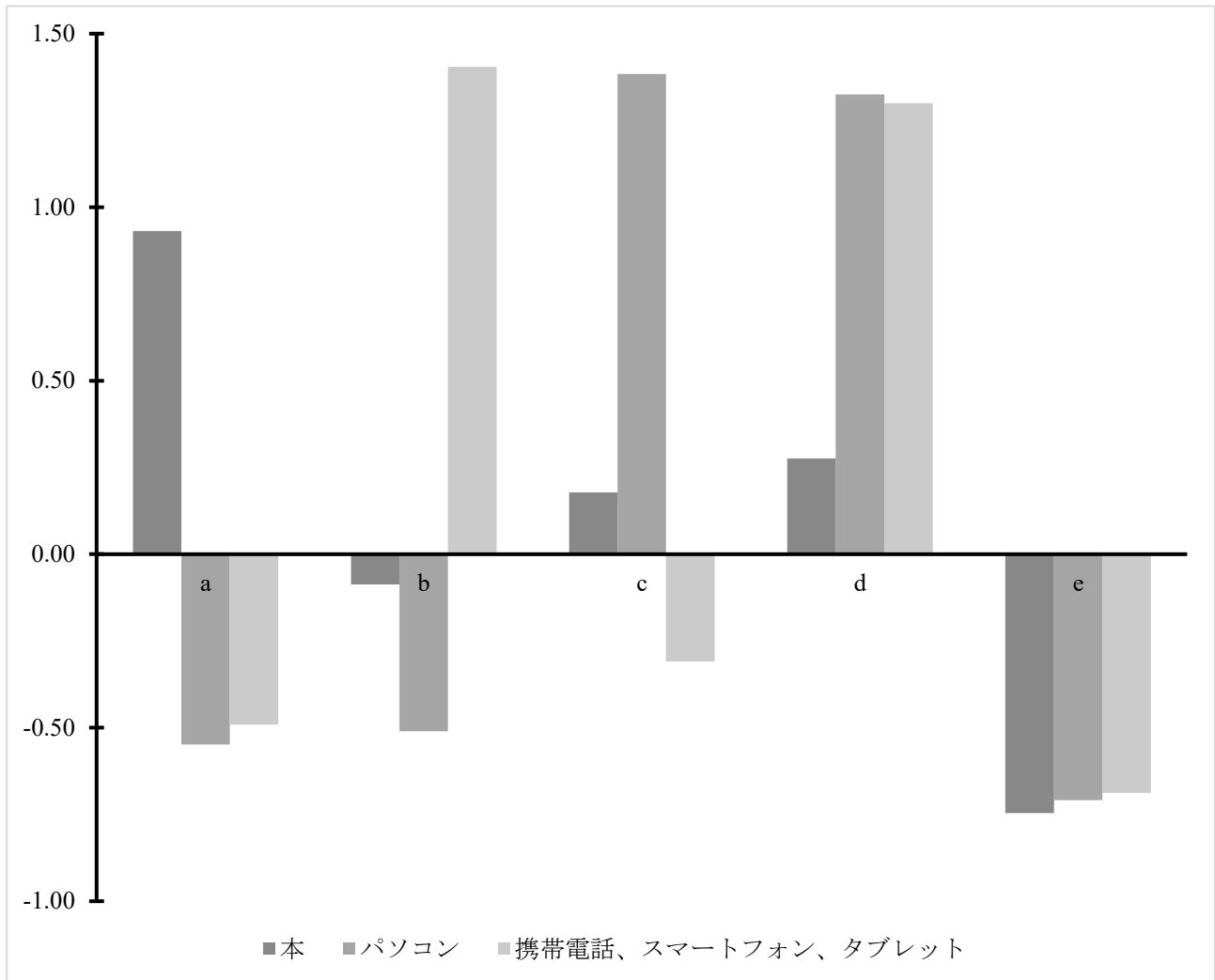
### 3-1. 読書媒体に関する結果

#### (1) 読書媒体に関する階層的クラスタ分析の結果

階層的クラスタ分析の結果、次の5群に分類できると判断した（図4-1）。

- ・紙媒体中心群 (a 群) : 本（紙媒体）による読書時間が長く、それ以外のツールによる読書時間が短い。
- ・スマートデバイス中心群 (b 群) : 携帯電話、スマートフォン、タブレット等スマートデバイスによる読書時間が長く、それ以外のツールによる読書時間が短い。
- ・パソコン中心群 (c 群) : パソコンによる読書時間が特に長い。
- ・パソコン・スマートデバイス中心群 (d 群) : パソコンとスマートデバイスによる読書時間が長い。
- ・読書時間低群 (e 群) : すべてのツールによる読書時間が短い。

性別や年代による偏りをみるため、クロス集計表を作成した。表4-1より、a、c、e群では、性別に大きな偏りは見られなかった。b群は女性の割合、d群は男性の割合が高かった。表4-2より、a、c群は60代、b、e群は30代、d群は20代の割合が高かった。



- a. 紙媒体中心群、b. スマートデバイス中心群、c. パソコン中心群、  
d. パソコン、スマートフォン中心群、e. 読書時間低群

図 4-1. 各クラスターの平均因子得点

表 4-1. 読書媒体のクラスターと性別のクロス表

クラスター	性別		合計
	男性	女性	
a. 紙媒体中心群	533 (48.6%)	563 (51.4%)	1,096 (100.0%)
b. スマートデバイス中心群	170 (34.3%)	326 (65.7%)	496 (100.0%)
c. パソコン中心群	331 (54.6%)	275 (45.4%)	606 (100.0%)
d. パソコン、 スマートフォン中心群	565 (57.4%)	419 (42.6%)	984 (100.0%)
e. 読書時間低群	901 (49.6%)	917 (50.4%)	1,818 (100.0%)

※n (クラスターごとの%)

表 4-2. 読書媒体のクラスターと年齢階層のクロス表

	年齢階層					合計
	20代	30代	40代	50代	60代	
a. 紙媒体中心群	201 (18.3%)	180 (16.4%)	198 (18.1%)	239 (21.8%)	278 (25.4%)	1,096 (100.0%)
b. スマートデバイス中心群	142 (28.6%)	145 (29.2%)	101 (20.4%)	61 (12.3%)	47 (9.5%)	496 (100.0%)
クラスター c. パソコン中心群	41 (6.8%)	53 (8.7%)	119 (19.6%)	158 (26.1%)	235 (38.8%)	606 (100.0%)
d. パソコン、 スマートデバイス中心群	212 (21.5%)	194 (19.7%)	201 (20.4%)	204 (20.7%)	173 (17.6%)	984 (100.0%)
e. 読書時間低群	404 (22.2%)	428 (23.5%)	381 (21.0%)	338 (18.6%)	267 (14.7%)	1,818 (100.0%)

※n (クラスターごとの%)

## (2) 読書媒体のクラスター×現在の意識・非認知能力

読書媒体（クラスター）を独立変数、年齢を共変量、現在の意識・非認知能力（自己理解力、批判的思考力、主体的行動力）を従属変数とした共分散分析を実施した（表 4-3）。

主効果に有意差が得られたため、Holm 法による多重比較検定を実施した。分析の結果、a 群、b 群、c 群、d 群における現在の意識・非認知能力が、読書時間が短い e 群よりも高かった。加えて、a 群の非認知能力は最も高い傾向がみられた。しかしながら、効果量は小さいため解釈には注意が必要であり、今後詳細な検討が必要であると考えられる。

表 4-3. 読書媒体のクラスターによる現在の意識・非認知能力の違い

	a (n = 1,096)	b (n = 496)	c (n = 606)	d (n = 984)	e (n = 1,818)	統計値	多重比較 (効果量)
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
自己理解力	14.02 (3.07)	13.48 (3.22)	12.98 (3.20)	13.51 (3.34)	12.26 (3.30)	$F(4, 4994) = 59.23, p < .001, \eta^2_G = 0.05$	$a > b^{**} (d = 0.17), a > c^{***} (d = 0.32),$ $a > d^{**} (d = 0.16), a > e^{***} (d = 0.55),$ $b > c^* (d = 0.16), b < d (d = 0.01),$ $b > e^{***} (d = 0.38), c < d^{**} (d = 0.16),$ $c > e^{***} (d = 0.23), d > e^{***} (d = 0.39)$
批判的思考力	13.48 (3.20)	12.76 (3.34)	12.61 (3.42)	13.06 (3.38)	11.89 (3.34)	$F(4, 4994) = 44.95, p < .001, \eta^2_G = 0.03$	$a > b^{***} (d = 0.22), a > c^{***} (d = 0.26),$ $a > d^* (d = 0.13), a > e^{***} (d = 0.48),$ $b > c (d = 0.05), b < d (d = 0.09),$ $b > e^{***} (d = 0.26), c < d^{**} (d = 0.14),$ $c > e^{***} (d = 0.22), d > e^{***} (d = 0.35)$
主体的行動力	13.11 (3.08)	12.55 (3.30)	12.41 (3.22)	12.89 (3.25)	11.58 (3.02)	$F(4, 4994) = 51.18, p < .001, \eta^2_G = 0.04$	$a > b^{**} (d = 0.18), a > c^{***} (d = 0.22),$ $a > d (d = 0.07), a > e^{***} (d = 0.49),$ $b > c (d = 0.05), b < d (d = 0.11),$ $b > e^{***} (d = 0.31), c < d^{**} (d = 0.16),$ $c > e^{***} (d = 0.27), d > e^{***} (d = 0.42)$

a: 紙媒体中心群、b: スマートデバイス中心群、c: パソコン中心群、d: パソコン中心群、スマートデバイス中心群、e: 読書時間低群

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

### 3-2. 過去の読書量に関する結果

#### (1) 過去の読書量に関する階層的クラスター分析の結果

分析の結果、次の4群に分類できると判断した(図4-2)。

- ・小中高少群：小中高を通して読書量が少ない。
- ・上昇群：小中高で緩やかに読書量が上昇している。
- ・低下群：小中高で読書量が低下している。
- ・小中高多群：小中高を通して読書量が多い。

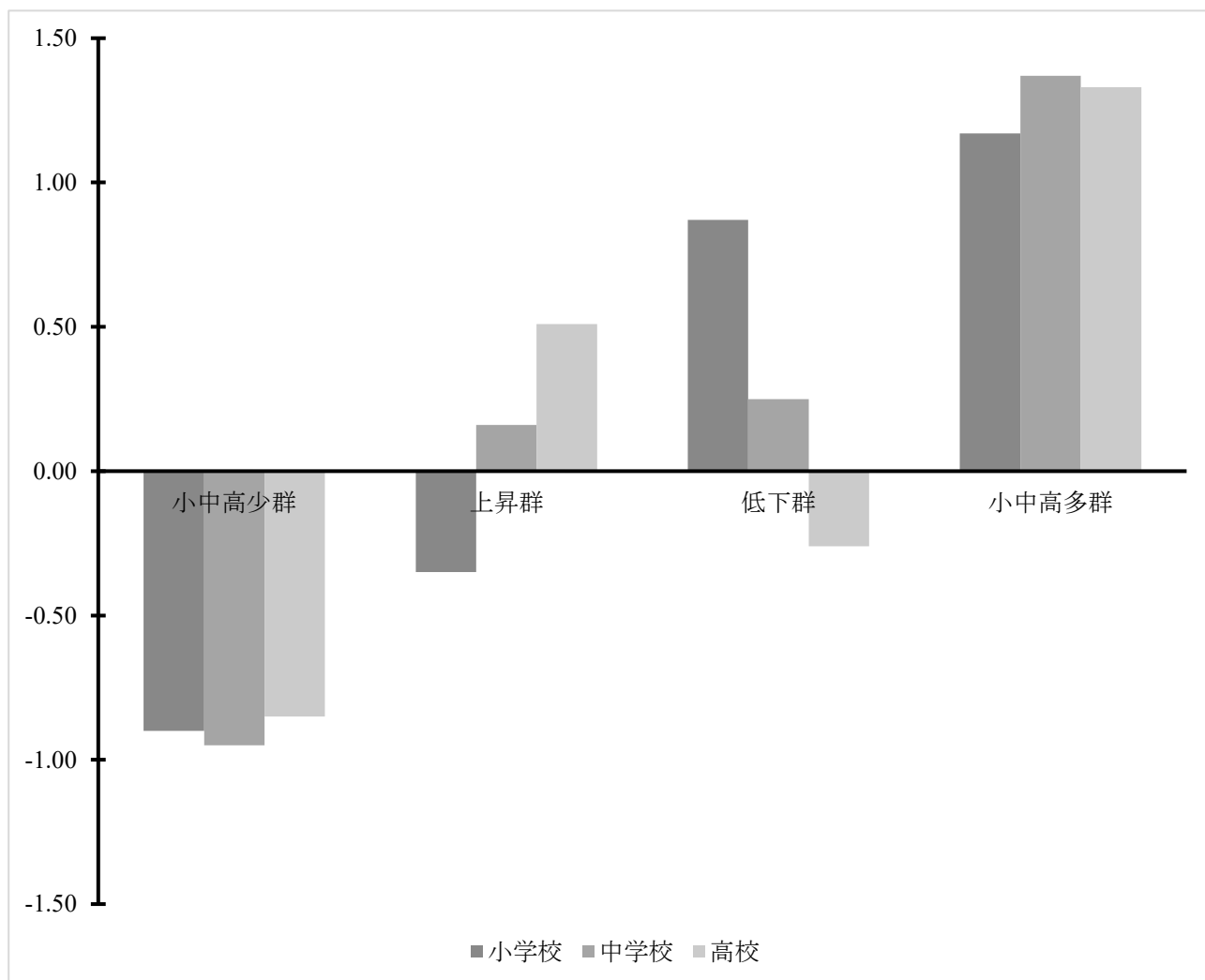


図4-2. 各クラスターの平均因子得点

表 4-4. 過去の読書量のクラスターと性別のクロス表

	性別		合計	
	男性	女性		
クラスター	小中高少群	1153 (60.0%)	769 (40.0%)	1,922 (100.0%)
	上昇群	595 (57.8%)	434 (42.2%)	1,029 (100.0%)
	低下群	391 (38.2%)	633 (61.8%)	1,024 (100.0%)
	小中高多群	361 (35.2%)	664 (64.8%)	1,025 (100.0%)

※*n* (クラスターごとの%)

表 4-5. 過去の読書量のクラスターと年齢階層のクロス表

	年齢階層					合計	
	20代	30代	40代	50代	60代		
クラスター	小中高少群	375 (19.5%)	467 (24.3%)	400 (20.8%)	377 (19.6%)	303 (15.8%)	1,922 (100.0%)
	上昇群	197 (19.1%)	169 (16.4%)	204 (19.8%)	188 (18.3%)	271 (26.3%)	1,029 (100.0%)
	低下群	255 (24.9%)	187 (18.3%)	205 (20.0%)	189 (18.5%)	188 (18.4%)	1,024 (100.0%)
	小中高多群	173 (16.9%)	177 (17.3%)	191 (18.6%)	246 (24.0%)	238 (23.2%)	1,025 (100.0%)

※*n* (クラスターごとの%)

性別や年代による偏りをみるため、クロス集計表を作成した。表 4-4 より、小中高少群と上昇群は男性の割合が高く、低下群と小中高多群は女性の割合が高かった。表 4-5 より、小中高少群は 30 代、低下群は 20 代、上昇群は 60 代、小中高多群は 50 代の割合が高かった。

## (2) 過去の読書量のクラスター×現在の意識・非認知能力

過去の読書量（クラスター）を独立変数、年齢を共変数、現在の意識・非認知能力（自己理解力、批判的思考力、主体的行動力）を従属変数とした共分散分析を実施した（表 4-6）。

主効果に有意差が得られたため、Holm 法による多重比較検定を実施した。分析の結果、どの指標においても小中高多群は他の群よりも有意に高かった。上昇群と低下群は、少群よりも有意に高かった。上昇群と低下群には有意差がみられなかった。

表 4-6. 過去の読書量のクラスターによる現在の意識・非認知能力の違い

	小中高少群	上昇群	低下群	小中高多群	統計値	多重比較 (効果量)
	( <i>n</i> = 1,922)	( <i>n</i> = 1,029)	( <i>n</i> = 1,024)	( <i>n</i> = 1,025)		
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
自己理解力	12.21 (3.31)	13.24 (3.02)	13.49 (3.08)	14.25 (3.27)	$F(4, 4995) = 92.05, p < .001, \eta^2_G = 0.06$	小中高少群 < 上昇群*** ( $d = 0.32$ ) 小中高少群 < 低下群*** ( $d = 0.40$ ) 小中高少群 < 小中高多群*** ( $d = 0.64$ ) 上昇群 < 低下群 ( $d = 0.08$ ) 上昇群 < 小中高多群*** ( $d = 0.32$ ) 低下群 < 小中高多群*** ( $d = 0.24$ )
批判的思考力	11.65 (3.30)	12.89 (3.08)	12.681(3.29)	14.07 (3.25)	$F(4, 4995) = 116.99, p < .001, \eta^2_G = 0.07$	小中高少群 < 上昇群*** ( $d = 0.38$ ) 小中高少群 < 低下群*** ( $d = 0.36$ ) 小中高少群 < 小中高多群*** ( $d = 0.75$ ) 上昇群 > 低下群 ( $d = 0.02$ ) 上昇群 < 小中高多群*** ( $d = 0.37$ ) 低下群 < 小中高多群*** ( $d = 0.39$ )
主体的行動力	11.51 (3.14)	12.58 (2.91)	12.41 (2.99)	13.73 (3.19)	$F(4, 4995) = 100.63, p < .001, \eta^2_G = 0.07$	小中高少群 < 上昇群*** ( $d = 0.35$ ) 小中高少群 < 低下群*** ( $d = 0.29$ ) 小中高少群 < 小中高多群*** ( $d = 0.72$ ) 上昇群 > 低下群 ( $d = 0.05$ ) 上昇群 < 小中高多群*** ( $d = 0.38$ ) 低下群 < 小中高多群*** ( $d = 0.43$ )

Note. \*\*\*:  $p < .001$

#### 4. 考察

文学読解において、読者は様々な感情を体験するが、先行研究では、体験した感情が読者に生じるカタルシスや自己理解の変容といった効果をもたらすことが示唆されている (e. g., Miall & Kuiken, 2002)。本調査研究は、年齢を統制した共分散分析の結果、読書時間が短い群に比べ、何かしらのツールを利用して読書を行っている群の自己理解力得点が高かった。また、読書量が少ない群に比べ、小中高の読書量がそれ以外の群、特に小中高の読書量が多い群の自己理解力得点が高かった。したがって、本調査研究の結果は、先行研究で提示されている仮説を支持すると考えられる。しかしながら、本調査研究における読書をしている群が、具体的にどのようなジャンルを読書しているかまでは調査していない。今後はその点も考慮した上で、検討する必要があると考えられる。

脇野・角谷 (2018) は、中学生を対象に批判的思考の一つである論理的思考と読書活動との関連を短期縦断的に検討した結果、両者に関連性がないことを報告している。本調査研究の分析結果では、読書時間低群に比べ、何かしらのツールを利用して読書を行っている群の批判的思考力得点が高かった。また、読書量が少ない群に比べ、小中高の読書量がそれ以外の群、特に小中高の読書量が多い群の批判的思考力得点が高かった。先行研究と異なる結果が得られたが、この理由として、脇野・角谷 (2018) の研究は中学生を対象としているが、本調査研究は成人を対象にしているため、これまでの様々な読書経験により批判的思考力が高まった可能性がある。

濱田他 (2016) は、本機構が過去に行った調査データをもとに、子どもの頃の読書活動、成人期の読書活動と主体的行動力に近い向上心を含めた意識・意欲・行動との関連を分析した結果、20代・30代は、子どもの頃の読書活動の充実が、直接的に現在の意識・非認知能力を高めること、40代・50代は、直接的な関連に加えて成人期の読書活動の充実を通じて現在の意識・非認知能力を高めることを示唆している。本調査研究は、ツールを利用した読書時間との関連を検討した結果、ツールに関わらず、読書時間が長い者ほど主体的行動力が高いことが示された。また、過去の読書量が少ない群に比べ、それ以外の群の主体的行動力が高いこと、上記二つの変数と同様に、小中高を通して読書を行っている群との違いが大きかった。したがって、本調査研究の結果は先行研究と類似した結果であり、ツールに関わらず読書活動をすること、小中高と継続した読書活動が主体的行動力を高めると考えられる。